



浅くなって様々な湿生植物が芽生えた大池の最上流部



4~5月頃に見られた
タガラシの花

生物多様性にも効果

池の水 減らして 水質改善

自然再生活動を進めている上尾丸山公園では、大池の水質を改善する新たな取組の試行を始めた。生物多様性が回復する効果も確認されている。



透明度が高い大池（5月）



広がったガマの茂みで営巣したカイツブリ

大池では2019年に初めてかいぼりをして以来、水質を維持する目的で毎年冬期に池底を干し上げている。2020年以降は夏期にアオコ等で水が濁る期間が短くなるといった効果が確認されているが、水質をさらによくするには池水の循環を改善することが重要だ。

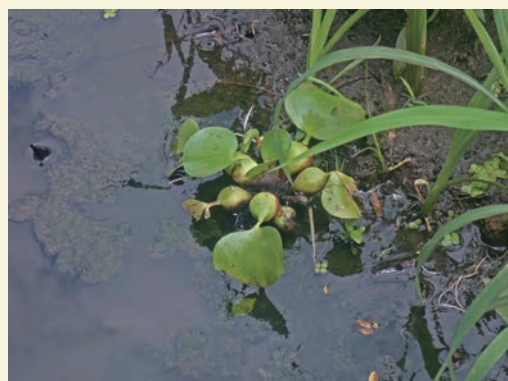
かいぼり前の大池は補給水（井戸水）の量が少なく、池水が入れ替わるのに計算上は38日を要していた。水が長期間滞留し、アオコ等が増殖しやすい環境なのだ。そこで2023年から新たな対策として、池の堰を調節して水位を10cmほど低くした。これにより池の水量が10%ほど少なくなり、池水の入替わり日数が3〜4日早まった。

さらに、池が浅くなったことで抽水植物が生育しやすくなり、ヒメガマやマコモが広がったことは、そこをすみかとする水鳥のカイツブリや、チョウトンボなどの増加につながる。また水深がともと浅かった池の上流部では、さらに浅くなったことで岸辺の一部に湿地環境が形成された。その湿地に、絶滅危惧種のミズアオイが生えてきた。シオウブ田の上流側では以前から確認されていたが、大池では初めての確認だ。埼玉県内の自生地は数ヶ所しか知られておらず、新たな生育地が確認されたことは特筆に値する。

水位管理と水質や生物多様性の関係を注視しながら、今後も大池の自然再生に取り組んでいく。

注目のトピックス

せつたいゲーム 動植物を放す・撤く



浅場へ投げ込まれたホテイアオイ

生物多様性の保全と再生に取り組んでいる上尾丸山公園の池や水路に、外来種の動植物を持ち込まれる事例が相次いで確認されました。

外来水草では、ホテイアオイ、オオフサモなどが確認されています。外来水草は増殖して水面を覆い、在来植物を駆逐してしまいます。

水草のほかに、ホタルの幼虫やカワニナなどの放流も確認されました。このように国内に分布している在来種でも、他所から持ち込まれた外来集団は、もともと分布していた在来集団の遺伝的特徴を失わせてしまったり、寄生虫や病原菌が侵入するリスクを高め



釣魚として人気のタイリクバラタナゴも外来種



特定外来生物オオフサモ

ます。協働で進めている自然再生の取組に反する行為ですので、他所で採集または購入した外来集団の放逐は絶対におやめください。

またこうした行為を目撃した場合には、市役所または公園管理事務所へご連絡ください。

※特定外来生物の運搬等は外来生物法で規制されています

上尾丸山公園 いきもの図鑑

コナギ(小水葱)

水深の浅い湿地に生育します。田んぼではおなじみの草ですが、上尾丸山公園では数が少なく、大池に整備した浅場に生育しています。夏に紫色の小さな花が咲きます。



めざせ！大池再生

みずべもり通信

- 浅場の微地形整備 -

湿生植物は、雨が多いときには水没し、少ないときには乾き気味になる、環境の変化の激しい湿地に生育する。大池の浅場は、こうした湿生植物の生育を期待して水深が0センチから数センチ程度になるように管理している。

と言っても実際には、水位を細かく調節するわけではなく、冬の間に浅場の表土をいじって微地形を整備するのだ。浅場の地形を観察しながら、浅すぎる箇所・深すぎる箇所を手作業で修正していく。もともとちょうどよかった箇所も、地形が固定化しないように土を動かすことが大事だ。攪乱して新たにできた裸地には、春に一年草の芽が出やすい。

湿生植物には、かつては水田雑草としてありふれていたものの、現在では田んぼの減少や乾田化によって絶滅危惧種になってしまった種が多くある。そんな植物が浅場にひよっこり生えてくるのではないかと夢がふくらむので冬の浅場の作業はやめられない。

ちゃんねる鰐

湿地再生活動が動画に！

地中に眠る50年前の植物の種を掘り起こして復活させる！

3月に開催した「みんなで水辺守湿地編」に、人気YouTuber「ちゃんねる鰐」さんが初登場。えげつない作業力をいかんなく発揮して湿地再生に奮闘する様子をどうぞご覧ください！



深すぎた箇所に湿地の泥を補充し、水位を調整 (2023年5月)